

「月のさばく」

月のさばくを はるばると

たびのらくだが 行きました

金と銀との くらおいて

二つならんで 行きました

金のくらはには 銀のかめ

銀のくらはには 金のかめ

二つのかめは それぞれに

ひもでむすんで ありました

先のくらには 王子さま

あとのくらには おひめさま

乗った二人は おそろいの

白い上着を 着てました

ひろいさばくを ひとすじに

二人はどこへいくのでしよう

おぼろにけぶる 月の夜を

対のらくだは とぼとぼと

さきゆうをこえて 行きました

だまつてこえて 行きました

「冬の星ざい」

木がらしとだえて さゆる空より

地上にふりしく くすしき光よ

ものみないこえる しじまの中に

きらめきゆれつつ 星ざはめぐる

ほのぼの明りて ながるる銀が

オリオンまい立ち

スバルはさざめく

むきゆうをゆびさす

北とのはりと

きらめきゆれつつ 星ざはめぐる

「里の秋」

しずかなしずかな 里の秋

おせどに木の実の おちる夜は

ああ母さんと ただ二人

くりの実にてます いろりばた

明るいまるい 星の空

鳴き鳴き夜がもの わたる夜は

ああ父さんの あのえ顔

くりの実食べては 思い出す

さよならさよなら やしのしま

おふねにゆられて 帰られる

ああ父さんよ ぐぶじでと

今夜も 母さんと いのります

この道

この道はいつかきた道

ああ そうだよ

あかしやの花がさいてる

あのおかはいつか見たおか

ああ そうだよ

ほら 白い時計台だよ

この道はいつかきた道

ああ そうだよ

お母さまと馬車で行ったよ

あの雲もいつか見た雲

ああ そうだよ

さんざしのえだもたれてる

花 春のうららの すみ田川

のぼりくだりの 船人が

かひのしずくも 花とちる

ながめを何に たとうべき

見ずやあけぼの つゆあびて

われにももの言う さくら木を

見ずや夕ぐれ 手をのべて

われさしまねく 青やぎを

にしきおりなす ちようていに

くるればのぼる おぼる月

げに一こくも 千金の

ながめを何に たとうべき

「花のまち」

七色の谷をこえて

ながれて行く 風のリボン

わになつて わになつて

かけていったよ

歌いながら かけていったよ

うつくしい海を見たよ

あふれていた 花のまちよ

わになつて わになつて

おどつていたよ

春よ春よと おどつていたよ

すみれ色してたまごで

な
い
て
い
た
よ
ま
ち
の
角
で

わ
に
な
っ
て
わ
に
な
っ
て

春
の
夕
ぐ
れ

ひ
と
り
さ
び
し
く
な
い
て
い
た
よ

月の砂漠

作詞 加藤まささを 作曲 佐々木すぐる

月の砂漠を はるばると
 旅のらくだが 行きました
 金と銀との くら置いて
 二つならんで 行きました
 金のくらはに 銀のかめ
 銀のくらはに 金のかめ
 二つのかめは それぞれに
 ひもで結んで ありました
 先のくらはに 王子さま
 あとのくらはに お姫さま
 乗った二人は おそろいの
 白い上着を 着てました
 ひろい砂漠を ひとすじに
 二人はどこへ いくのでしょうか
 おぼろにけがる 月の夜を
 対のらくだは とぼとぼと
 砂丘を越えて 行きました
 だまって越えて 行きました

冬の星座

作詞者 堀内敬三 作曲者 ヘイス

1 木枯とだえて さゆる空より
 地上に降りしく 奇しき光よ
 ものみないこえる しじまの中に
 きらめき揺れつつ 星座はめぐる

2 ほのぼの明りて 流るる銀河
 オリオン舞い立ち スバルはさざめく
 無窮をゆびさす 北斗の針と
 きらめき揺れつつ 星座はめぐる

3 さよならさよなら 椰子の島
 お舟にゆられて 帰られる
 ああ父さんよ 御無事でと
 今夜も 母さんと 祈ります

この道

作詞 北原白秋 作曲 山田耕筰

この道はいつかきた道
 ああ そうだよ
 あかしゃの花が咲いてる
 ああ そうだよ
 この道はいつか見た丘
 ああ そうだよ
 ほんの白い時計台だよ
 この道はいつかきた道
 ああ そうだよ
 お母さまと馬車で行ったよ
 ああ そうだよ
 この道はいつか見た雲
 ああ そうだよ
 山査子の枝も垂れてる
 ああ そうだよ
 花
 春のうららの 隅田川
 のぼりくだりの 船人が
 櫂のしずくも 花と散る
 ながめを何に たとうべき
 見ずやあけぼの 露あびて

作曲 滝 廉太郎

われにも言う 桜木を
見ずや夕ぐれ 手をのべて
われさしまねく 青柳を
錦おりなす 長堤に
暮るればのぼる おぼろ月
げに一刻も 千金の
ながめを何に たどうべき

花の街

作詞 江間章子 作曲 團伊玖磨

七色の谷を越えて
流れて行く 風のリボン
輪になって 輪になって
かけていったよ
歌いながら かけていったよ

美しい海を見たよ
あふれていた 花の街よ
輪になって 輪になって
踊っていたよ
春よ春よと 踊っていたよ

すみれ色してた窓で
泣いていたよ 街の角で
輪になって 輪になって
春の夕暮れ
ひとりさびしく ないていたよ